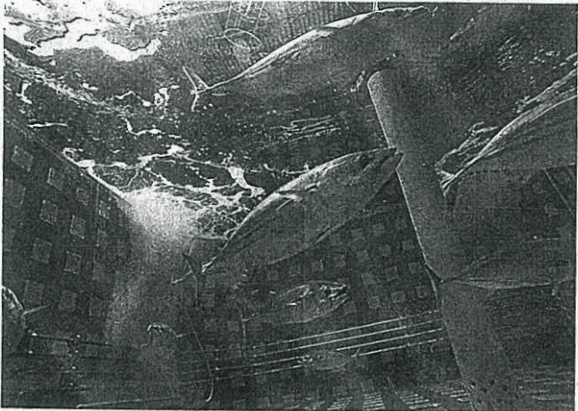


カツオ養殖 未来開く

県内産学タッグ 挑戦中

大洋を泳ぐカツオを養殖できないか。そんな前代未聞のプロジェクトが始まっている。高知の企業と産学タッグを組み、親魚から卵を取り、人工化させ、脂の乗った「ロコカツ」に育てるという。日本周辺の天然カツオ資源の減少が深刻な中、カツオ界の新しい未来を切り開くという取り組みだ。

35面 高知発 技術輸出に夢



養殖実験第1弾のカツオは全滅。そこから課題の解決策を探り、完全養殖への挑戦が続く(昨年11月、大月町古瀬目)

食料問題の解決策に

「何かストレスが掛かると水槽の魚が明らかに弱る。餌の食いも減る。」「同社は、微突防く、餌を死なず提供するのみに水槽の壁に塗られた赤い格子模様をカツオの状態に影響させているのではないかと仮説を立てた。

昨年11月、幡多郡大月町古瀬目の海辺にある「山崎技研」の新魚種開発施設。容量50tの大型水槽の中で、3〜4mのカツオがゆったりとした速度で泳いでいた。紡錘形の魚体がぐるぐる回る様子はメリゴーランドのようだった。

同社と高知大学が、産学官連携の新事業を支援する農補助金を支けて、昨年スタートさせた3年がかりの共同研究。親カツオを飼育▽採卵▽人工稚魚育成▽という「完全養殖」のサイクルを確立するため、産学官連携に向ける。カツオは、栄養管理によって高付加価値の「トロカツ」に仕上げるという。

取り組みは手探りだ。昨年10月、水産業者から譲り受けた成魚のカツオ30匹を水槽に入れた。しかし、弱って餌を食べない個体が出始め、1カ月ほどで全滅してしまった。

「何かストレスが掛かると水槽の魚が明らかに弱る。餌の食いも減る。」「同社は、微突防く、餌を死なず提供するのみに水槽の壁に塗られた赤い格子模様をカツオの状態に影響させているのではないかと仮説を立てた。

12月中旬、第2弾の40匹を再び仕入れた。今度は、模様のある水槽と模様のない水槽に分けて飼育。模様なしに実験回数を重ねてい

「何かにストレスが掛かると水槽の魚が明らかに弱る。餌の食いも減る。」「同社は、微突防く、餌を死なず提供するのみに水槽の壁に塗られた赤い格子模様をカツオの状態に影響させているのではないかと仮説を立てた。

「カツオ飼育の難点は餌をひく餌をえん。高い」としつつも、狭い水槽でも飼われよう。まく使って泳いでい

「何かにストレスが掛かると水槽の魚が明らかに弱る。餌の食いも減る。」「同社は、微突防く、餌を死なず提供するのみに水槽の壁に塗られた赤い格子模様をカツオの状態に影響させているのではないかと仮説を立てた。

「研究費は、親魚から採卵まで自費する」とも、県外の施設から、も卵の採卵を受け、高知大学の施設で人工化させる。それらの実験過程で、細かいデータを取集めていくという。

「研究費は、親魚から採卵まで自費する」とも、県外の施設から、も卵の採卵を受け、高知大学の施設で人工化させる。それらの実験過程で、細かいデータを取集めていくという。

「ただ、仮実験がうまくいったとしても、親魚カツオが歓迎されるのか。高価で売れる高品質のトロのように、繁殖サイクルのようになり、成長して成立するかどうか。」「プロジェクトを担当する高知大学の大学院生は、それが望みです。カツオは、単なる天然資源ではなく、その品種改良を通じて、高度な養殖技術に挑戦したい。

「ただ、仮実験がうまくいったとしても、親魚カツオが歓迎されるのか。高価で売れる高品質のトロのように、繁殖サイクルのようになり、成長して成立するかどうか。」「プロジェクトを担当する高知大学の大学院生は、それが望みです。カツオは、単なる天然資源ではなく、その品種改良を通じて、高度な養殖技術に挑戦したい。

（八田大輔）